

蒼黒のルイーゼ・序

父はいい人だった。

温かく、思いやりがあり、誰からも好かれていた。
ただ私は、そんな父がたまらなく嫌で嫌で仕方なかった。

——ルドヴィカ誌第三章より抜粋

◆ プロローグ

絢爛^{けんらん}としていたブリックレッドの煉瓦塀は見る影もなく、打ち砕き、持ち去られた跡を隠すこともできずに晒されていた。そんな塀がぐるりと屋敷を囲う。東に一箇所、南に二箇所完全に崩れ落ち、自由に出入りできるのだから、塀として機能しているかどうか怪しいものだ。

今、正面から眺めてみても、もはや人が住んでいることを隠す魔女の館のように風化した屋敷は私自身、本当にここで暮らしているのか疑いたくなる。草木に番を譲った門番小屋にはうつすらとした暗がり氣息を潜めて留まり、叩けば粉々に砕けそうな錆びた鉄門は、触るのを躊躇うほど劣化していた。

それらを労る様に撫でた後、改めて向き直り肘と左の掌を合わせて、頭を垂れる。反射的にハンマーで叩かれた様に右の頬が引き攣り震えた。心はとつくに乗り越えたと思っても、体や無意識に残った傷は癒えないのだろう。

七年の月日は清廉潔白を謳った白い洋館をアイリーの蔦が覆う廃墟へと変えた。放置された屋根は雨が降れば、穴の空いた雨樋のように雨水を屋敷の至る所へ運び、屋敷は満遍なく雨の匂いに沈む。その度私に訪れるトラウマのフラッシュバックは、激しい動悸と嗚咽を与え、私の前に現れ続けた。それでもこの館から離れないのには訳がある。それは没落した者なりの意地のようなものだ。

気づけば左手を胸に当て、握りしめていた。指の背に当たる衣服の麻の感触が温かい。どんよりとした屋敷に対し、貴重な清涼な風は首元や袖口を通り、肌を撫でてはくすぐる。

それは空を覆う暗雲とは別のところから生まれ出たものだ。その風を呼び寄せるように左腕では青いサファイアの宝石が静かに光っていた。たとえば土砂降りの雨や嵐が吹こうとも、この輝きがなくなることはない。

「お辛いですか？」

車椅子を押す執事——ロイの声が頭の後ろから降ってくる。私は首を振った。

「私は辛くはないよ、生きてるからね。だが父や母、国やベルスの家族……皆を思えば悔しく思う」

「お嬢様はお強いお方です。ですが、もう休まれても誰も咎めません。だから——」
「だめだよ、ロイ」

頭上では、黒い雲が渦巻くように並び、具合を確かめるように時折小さく光ってはその厚みを増していく。周囲は暗くなり、温厚だった空気に肌冷える風がぶつかり競り立った冷気の壁が私を呑むように取り込み始める。訪れた冷気の中で私は空を見上げた。

「休めばきつと皆は安心するのだろう。皆が私を案じてくれていることは知っている」

「私も同じ気持ちでございます」

厚い雲は何層にも重なり、一つの塊になっていく。四方八方から生まれる霧状の雲の粒子は黒をシンボルとするように集まるが、端はまだ薄く、厚みのある雲とはいえなかった。だが空が光るたび、それらは行き先を見つけたように寄り合わさっていくだけに、やがて嵐となるのは時間の問題に思えた。

「絶対に嫌だと言うやつがいる」

「……………」

集まった雲の中で一つ、変わった動きをするものがあつた。黒い塊に集まるのではなく、寄り添わずにそのまま上へ上へと昇っていく。境界がはつきりせずとも、その雲は混ざることなく確かな意志があるように突き進んでいく。その先には黒い雲の本体があつた。

「私だ。私が嫌なんだ」

空からはポツポツと雨も降り始めていた。

「彼の近くにいくことになります」

「そうだな。確かにあいつは狂つてゐるが、それでも、根はいいやつだよ」

「許されることはありません」

「ロイ、人はみな同罪だ」

「天からはそうでも、私からは違います」

ついに雷鳴が鳴り始める。もう小さくはない、地平線まで照らすような雷光が一瞬だけ世界を真昼に切り取った。それから世界に再び帷を下ろすと、人々を地に縫い付けるほどの轟音が大地に響き渡った。頭上から殴りつけられたような衝撃に苦笑する。

「なら尚更不毛だよ。いくら憤ろうが道は決まっている」

一度、雷鳴が轟けば、あとは解禁とばかりに二度、三度、雷鳴の競走が始まる。重く、当たればよろめくような勢いの雨粒が体を濡らし始める。

「じいには耐え難く存じます」

「フフ——嫌ならクビだ。お前は本来名家に仕えるべき器量。今からでも遅くはない。栄えある名家へ斡旋してやるさ」

「ベルス家は栄えある名家に御座います」

「苔の生えた絨毯を敷く名家がどこにいる、フフ——」

本降りになってきた。帳は黒。手足の足りない私に代わり、ロイが傘を差して車椅子に固定してくれる。家にある希少な防水布をロイが加工して作った傘は、どんな雨風にも折れまいと、これまた希少な魚の骨を精巧に削り、結び合わせ、頑丈に仕上げてある。雨に当たるのは嫌いではないが、そんな私を案じてロイは愛着たつぷりの傘を拵えた。その策にまんまとはまり、私はこの傘を愛用している。

おかげで雨に身を晒すことはほぼなくなった。体調を整えるにはとても大事なことだ。けれど私にはどうしても譲れない習慣が一つあった。

傘の下から手を伸ばすと、指先にヒヤリとした感触を得る。するとまるで全身が氷の中に入ったかのように寒気が走る。コートを着込み、屋敷の中に閉じ籠り、そして一切の光を遮りたくなる。布団を頭から頭、耳を塞ぎ、雷光が瞬いては、叫び声をあげ、私はこの世界から自身を切り離したい衝動に駆られる。大地で芽生える花を刈り、空から注ぐ日差しに石を投げ、私に食事を与える者を呪う——そんな気配に体が満たされるのだ。

「うつ……」

「お嬢様——お召し物が濡れてしまします」

「……これ以上、ロイを泣かせるわけにはいかないか」

手を引く。

「恐れ入ります」

私はまだ、この雨を超えられない。

「行こう、我がアリエスター伯爵家復興の門出に相応しい空だ」

返事がない代わりに、車椅子の車輪がキコキコと回り出す。雨が体を打ち、道を濡らし、水溜まりを作るが、構わずその中を歩み進んでいく。道を作る煉瓦の隙間に挟まった砂利が顔を覗かし、こちらを見上げるが、それをゴム性の車輪で踏み込む。体を固定する革のベルトが、石畳の段差を踏む度、身体へと食い込み、痛みに体が喘ぐ。

『もう生きる意味などないだろ？』

頭の中では悪魔が囁く。死する理由は山ほどあったように思う。だが、死は選べずここにいる。

「気づけば七年、長かったな……」

車椅子の揺れに合わせ過去に思いを馳せた。

あの日から私は――

◆ 蒼黒のルイーゼ・序

議会判然とせず。

中央に向けて段々と低くなる構造の広間。それぞれの段には赤い絨毯が敷かれ、各段に大人たちがひしめくように並び中央を向く。段の幅は三メートル程。それが四段重なり、どの位置からでも広間の中央が見える仕組みとなっている。それに倣ってか、集った人々のはのめり込むように前傾し、真ん中で言い争う人の言葉に耳を傾け、時折声を挙げては加勢する。中央付近に立つ質素な布を纏い立派な口髭を蓄えた男が身振り手振りを交えながら声を張り上げていた。

「東の諸国に侮られると貿易品が軒並み高騰し、資本をこつそり持っていかれますぞ！」
対するは滑らかな絹の衣服を纏う着飾った男。質素な男と向き合うが、目を細め顎を持ち上げて見下ろすような角度で口だけを動かし返答する。

「その要因は辺境伯であるアリエスター伯爵にあるかと。自身の墮落を棚にあげ助けを乞うなど伯爵にあるまじき行為ですな」

コロッセオと見紛うほどの怒号と歓声。その声を背に受け立つのは質素な男アリエスター伯ボンド・ベルス。対する着飾った男はベルモント侯ドナン・アルベルトだ。二人は内に秘めた想いの一切を譲るまいと声に覇気を込め、お互いを睨み合っている。

「お言葉を返すようですがベルモント卿。我が国がなぜ東に遅れをとるか、考えるくらいはしていただきたい」

広間の比較的上質な布を着た者たちの多くがその発言に笑みを浮かべていた。示し合わせるように目線を左右に投げ、囁く者もあれば、何度も頷く者もある。対して比較的質素な服装の者たちは、皆手に力を込め、高い熱量でボンドの言葉に賛同の声をあげていた。ただドナンらはそれを聞いても余裕のある相好を崩さず、変わらぬ調子で反論をする。

「もちろん考えておる。確かに一見すると工芸の停滞が理由といえよう。しかしその根本的な原因は地方の税収減にある。特にアリエスター領はここ数年、税収が減り続けておる。責任を果たせない自身の無能さをよく晒せるものだ」

広間の至る所から嘲笑が漏れる。しかし、そうならない者は、波紋が静まるのを待つようにじつと待ち続けているか、己らへの冷遇に憤りを抱え、冷徹な視線をドナンへと向けていた。無論、ボンドの視線も同じである。

「我らはたとえ手足が千切れようとも働き続ける。だがどうしようもできないこともある。税収減は増税以降のこと。国境付近は防衛費用も要る上に税まで上がれば水害や害虫対策に手が回らなくなるのは火を見るより明らかでありましょう。限界も近い。税を緩和し、中央の財を地方に投資せねば国は痩せ細る一方ですぞ」

そうだ、どうにかしろ、能無しがと罵声が飛ぶ。ドナンが視線を向ければ、後ろに控えた男が蠟板に手を走らせた。

「――口が過ぎますな、アリエスター伯爵。中央の財は王の所有物であり、その分配について議論することはまかりなりませぬ」

ドナンは口元の髭を指先で摘んで撫で、艶を確認した。対峙するボンドが体の脇で拳を強く握りしめる。

「しかしこのままでは——！」

広間の熱気が一段と高まる。まるで熱球でも投じられたように、ボンドを中心に内側から外へ向けて、熱のこもった呼気がわつと舞う。波打つように肩が上下し、人々は重心を落とし、膝に力を溜めた。どの結末にすれ、自身の身は守ろうと上質な衣に身を纏った男たちは、その場からすぐ立ち退けるよう退路を探す。混沌に熱された水銀のような激情が入れば、たちまち膨大な被害が生じるだろう。水銀のような毒となった感情が広間で爆発しようとしていた。ドナンも起きうる粗暴な結末に身構えたその時だ。広間に一筋の涼風が熱風を吹き払った。

それは一人の男の呟きだった。

「ふむ……まとまらないか」

途端、沸騰しかけていた水銀がごとき感情はぶすぶすと音を立てるように鎮火した。燃え上がる議論の火に隠れるようにあつたが、それは触れば大火も容易く消える巨大な氷山のような絶対的な存在感を有する。男がつぶやいた一言は強烈な爆風のごとく火を消し去った。誰もが話すための酸素を失う。

口が閉じる代わりに視線はその男へ向けられた。男は表情一つ変えず、今起きたことなど露知らず、袖をゆつくりと振って、大様に腕を組み、手を顎に置いてみせた。白晢^{はくせき}の相貌やプラチナブランドの髪も彼そのものを際立たせる背景でしかない。その本質は見えざる流れにある。時間が引き延ばされたような所作に誰もが虚を打たれると共に、話が終わ

りであることを悟る。

長い睫毛の奥でじつと真実を見やる瞳が議会全体を見渡した。夫人らは生唾を飲み、スカート裾を握り締む。男らは天の裁きを待つ信徒のように至つて平静に、内心嵐のような緊張に身を固めた。

その男が緊張の波を視線で払うように議会を見渡すとある一点で動きを止める。外の方の段で俯いている女性を見、口を開いた。

「アリエスター嬢。これについてどう思う？」

首の角度が上がった先、覗く瞳の色は蒼。女の細く引かれた唇が開く。

「私、でしょうか」

「そうだ」

女は一步踏み出すたび真紅のドレスを上下に揺らし、足先を突き立てるような歩調によつて、棒立つ人々の壁を割り、議会の中央へと進み下りた。広間の全員が中央に浮かぶ赤いばたんのような女を見つめる。髪は金細工のように光る美しい金髪だが、瞳だけが燦んだ蒼のような色に染まっている。そのコントラストが女の異様さをより一層際立たせ、同調に何よりも安心する議会において、人々の心をざわめかせた。ただし、多くの者はその瞳を目の当たりにする頃には、蠍に捕まったように動けなくなる。それは由緒ある貴族にあつても同じで、見た目は宙に舞う埃すら神聖な光に転じる美姫であり、真相は睨まれると動けず毒を打ち込まれる蠍のような魔女だった。名をアリエスター伯爵令嬢ルドヴィカ・ベルスと云った。彼女はそれらの視線を一手に引き受けてなお、怯まず堂々と足を進める。姫様、姫様、と固唾を飲んだ声が手火のように灯る。議論する二人の前に出ると、一

つ間をおいてからゆつくり息を吐き、口を開いた。

「確かに財は王のもの……なれば地方での生産物も当然、王のものにございましょう。故に財が地方に分散したとて、それは王のものに変わりないかと。それを前提に、我々は王の財をいかに増やせるか考えるべきかと」

ルドヴィカがドナンを正面から見据える。

※この続きは製品版に収録されています